

# 芥川谷崎の小説論争観

成瀬正勝

芥川龍之介が、「話らしい話のない小説」を望み、小説は「構造的な美観」を持たなければならないとした谷崎潤一郎の意見に異説をさしはさんだのは、彼の死の直前、昭和二年のはじめのことであつた。わたくしなどのまつたく文学青年といふべき時期であつた。まだ定見のあるはずもなかつたわたくしの如きは、この両大家の論争を、ただあれよあれよと眺めてゐる程度であつた。

それから五年ほど経つて、拙い文学時評を試みるやうになつたわたくしは、こんなことをそれについて述べてゐる。

「必ずしも明確な姿で表目されてゐたとは云へないが、芥川龍之介氏は「筋のない小説」のなかに、秩序を求めんとする詩的精神の活動を予想し要望した。これが氏の小説に於ける雑駁克服の道であつた。谷崎潤一郎氏にとつては、その「筋のある小説」とは現実に切迫する散文精神の棲家である。小説といふ散文形式を構成するに当つて、詩的精神と散文精神との分裂を惹起した、即ち散文精神の雑駁に災ひされ、これから脱れるために詩的精神の庇護を蒙らなければならなかつたといふことに、私は芥川氏の不幸な資質を見ないではゐられぬ。が、これに反して、谷崎氏には遂に分裂がない。散文精神といふものの自体が、ここでは洋々たる大河をなして、その散

文形式を流れるときに、自ら純一無雑の結晶と化するのである。」わたくしはここで久保田万太郎さんが、谷崎さんの「蓼喰ふ虫」のなかの人形芝居に関する叙述にも、なほ一脈の雑駁さを感じてゐられるといふ意見をさしはさんで、「氏（久保田氏を指す）の謙讓な潔癖な資質は、初めから雑駁となるべき危険な素因を排除してとりかかるのである。こんな風に、作家の方法論は畢竟、彼の資質の方向によつて決定されて行く。」と述べてゐる。昭和七年九月の「新潮」に所載されてゐる。わたくしの数え年二十七才のときである。

しかしそれから十数年経つて、戦後に福田恒存氏が書いた論文では、この芥川の詩的精神への自覚を重視し、それに反して谷崎がそれを軽視してゐるといふ点を鋭く追究してゐた。氏は論争當時は作家の資質の相違などで片付けてゐたといひ、しかし芥川のそのやうな詩的精神への憧憬が、近代文学の発想上重要なポイントなので、これを閑却した谷崎の意見は近代性において欠けるところがあるといふのである。これは氏の論文集「平衡感覚」といふのに載つてゐたと思ふ。それをもう少しはつきり紹介したのであるが、いま生憎書架に見出しかねるので、これ以上を述べるわけにいかない。福田氏がいはれるところを見ると、當時はわたくしの外にも資質論で

割り切つてゐた批評があつたのであらう。といふより、当時ではかういふ資質論がある意味で新しかつた。資質の尊重、個性の重視といふことが、流派的な個性軽視の流行現象に対する——とくにプロレタリア派の公式論を含めての——反措定としてさかんにいはれ出してゐた季節だつたのである。因みにいふが、この頃の批評では、故人である生存者であるとを問はず、作家も批評家も呼びすてであるが、当時は生存者にはよほど親しい友人などでなければ呼びすてなどにはしなかつた。こんなところにも時代の推移がある。

さて、わたくしは最近にいささか大正文学に首を突つこんでゐる。そして大正後期といはれる時代から昭和初期にわたる時代に、志賀直哉の文学が大きく浮び上つてゐる現象を見逃すわけに行かない。明治の末期から大正期への文学的展開に、森鷗外と夏目漱石とが、藤村、独歩、花袋らの自然主義作家を抑へて大きくクローズ・アップされてゐること、それが「スバル」や「白樺」の作家達に影響を与へて大正文学の特質を築き上げてゐることは、今日の文学史家の通念になりつつあるが、それに続く次代の文学精神がある程度志賀直哉を基調とするといふ見方を閑却できないやうに思ふ。谷崎文学ですらその後半期の大成は、彼の関西移住後に、志賀との交友を通じて果し得たといふ見解をわたくしはとつてゐる。それはあの「文章読本」が一面志賀文体の礼讃に専らであるといふ具体例を待つまでもなく、名作「蓼喰ふ虫」以後の文体の緊密度は志賀文学の味読と深い関係をもつと思ふからである。同じやうなことは、芥川文学にも起つた。しかし後者の場合では、それは大成に結びつかず敗北へと追ひやられた。彼は書いた。

「志賀直哉氏は僕等のうちでも最も純粋な作家——でなければ最も純粋な作家たちの一人である。」その理由については、——第一に道徳的天才、第二に空想を頼まぬリアリスト、第三に東洋的伝統の上に立つ詩的精神の注入、第四にすぐれたテクニシャン等々をあげてゐる。そしてこの文章が、いま谷崎氏との論争に使はれた「文芸的なあまりに文芸的な」の第五節にかかげられて、第四節の「大作家」のなかで、ゲエテのような大作家よりも純粋な作家を求める彼の意図に続いてゐるといふ事実からしても、彼の理想とした作品が志賀直哉の作品に近いところに位置してゐたことは察するに難くない。彼は自らテクニシャンをもつて恐らく任じてゐたであらう。しかし同様のことは、志賀文学にも存在すると彼はいふ。だとすれば、彼が純粋とするものは道徳的天才とリアリストと東洋的な詩的精神とに外ならなかつた。そしてそれは彼自身にとつて必ずしも充実してゐるといへないものばかりであつた。自己に精神的宣言を意識し、破れやすい人工の翼に機智の神経を乗せて飛翔した過去の我が文学を反省する彼にとつて、その憧憬するものが凡そ自己とかけはなれた志賀的資質であつたことはまづたく不幸であつたのである。この場合谷崎文学とは全然逆であつた。彼は技法においてこそ志賀文体の影響を受けたが、その資質を曲げることはいささかもしなかつた。すなはち志賀とのめぐりあひは前述の如くに大成への道であつた。しかし芥川の場合では、問題は技法ではなかつた。やや大げさな表現を用ゐれば、それは彼の資質を代へることに外ならなかつたのである。そしてこのやうな引きかへは、まさしく自己否定に導かれる敗北への道でなくてなんであらう。彼はまもなく自ら世

を辞したが、文学的な自殺はすでに遂行されてゐたのである。

このやうに考へて行くと、芥川谷崎の小説論争に、志賀直哉の介在を見逃がすことはできないのである。もちろん論争自体としては、近代文学における詩精神を、小説の世界においていかに扱ふかといふ大問題をはらんでゐたに違ひなかつた。しかし具体的に、より切実には、芥川龍之介が、志賀文学の魅力によつて圧倒されてゐたといふ事実により多くよりかかつてゐるところがある。志賀文学が生命力な気魄にみちて、大正期を特色あらしめた私小説の世界に、東洋的感性の眼を据ゑたところに、芥川の望む詩的精神はあふれてゐる如くに映つたのである。一方その前で谷崎文学はまだ後年の大成を遂げてはゐなかつた。前述の「蓼喰ふ虫」は、翌昭和三年の末から世に問はれたのもあつた。もし芥川が志賀文学に圧倒されなかつたら、そしてさらにまた、前掲の谷崎作品に眼を触れたあとであつたなら、はたしてこの論争は起り得たであらうかといふ疑問もわたくしには浮んでならないのである。

附記——お約束した約三十枚の原稿はこれではなかつた。それは福岡滞在中に書き上げるつもりであつたが、旅中の繁忙で果さず、帰路疲労のためか発熱して今日に至つた。時日の切迫を思ひ、早急に改めてこの稿を草した。意に尽さぬところのあるのを諒とせられたい。

— 東京大学教授 —